

この月刊サワネを、お知り合いの方に見せてあげてください、きっと喜んでいただけます。

## 本『手抜き力』 齋藤孝著

KKベストセラーズ 1,512円 207頁  
手抜きというと悪い意味にとらえてしまいがちですが、著者は、手抜きを積極的に活用し生産性を高めようと提唱しています。

以下で、手抜き5つの実践ルールをご紹介します。

### 手抜き5つの実践ルール

- 1 優先順位を最優先に決める
  - 2 「念のため」と「一応」をやめる
  - 3 自分の「型」を決めて落とし込む
  - 4 野生の感覚で行動する
  - 5 「逆算」と「段取り」の習慣をつける
- 1 優先順位を最優先に決める  
複数の仕事をこなさなければならないときに、なにから始めるか。それが優先順位です。簡単そうなものからでもなく、締め切りの早い物からでもなく、重要なものから始めなければいけません。それが優先順位です。優先順位の高いものを片付けて、次に進む。仕事のそれぞれにデッドラインをつけると効率は圧倒的に高まる。
- 2 「念のため」と「一応」をやめる  
「君、一応、この資料を作っておいてくれ」  
—実際に使う資料だけを用意すればよい。用意した資料を使い切る会議にすればよい。  
「念のため、もう一回集まりましょうか」  
—本当に話し合うべき議題があるときだけ集まればよい。
- 「念のため」とか、「一応」に頼るのは、ゴールがはっきり見えていないからだ。
- 筆者は、あるときから論文生産力が飛躍的に高まった。それ以前は「念のため」の資料を片っ端からコピーして揃え、そのすべてに目を通してから書き始めるスタイルだった。それを一切やめて、「論文でいちばん大事な

のはコンセプトだ」というところからスタートするようにした。つまり、テーマはこれで、コンセプトはこう、ボリュームは原稿用紙40枚。このようにゴールを決めてからそのための必要最小限の準備をするようにしたのだ。

- 3 自分の「型」を決めて落とし込む  
自分なりの型を持つとは、「自分なりの基準を持つこと」でもある。たとえば、一定の企画書を書くことになったとする。その条件を見ると、A4用紙一枚で収まることがわかる。次に、そのサイズであれば30分で書けると判断できる。その時間であれば、日程のどこに挟み込めばよいか決定できる。
- 4 野生の感覚で行動する

仕事を本能でこなす必要があることも多い。その時に大切なのは野生の感覚だ。サバンナにいるシマウマが、ライオンを見つけたら、何も考えずにさっと逃げ出す。群れのリーダーが逃げろというのを待って逃げるといようなことはないはずだ。これが野生感覚だ。野生感覚を取り戻すためのスキルが「手抜き力」だ。最小限の時間と手間ですべての本質だけを捉える「手抜き力」によって野生感覚が磨かれる。

- 5 「逆算」と「段取り」の習慣をつける  
娯楽映画の巨匠と呼ばれたマキノ雅弘という映画監督がいる。頭の中で映画のすべてのシーンができ上がっていて、撮影現場ではスタッフや俳優にムダなことを一切要求しなかった。自分が撮りたいシーンが明確だから、撮るべきもの、撮らなくていいものがある。ゴールから手順を逆算するから、プロセスで不要なものを徹底的に省略できる。

「ゴールから考える」は、すぐに使えそうですね。自分が今していることは、何のためなのか、ゴールはどんな姿なのか。使ってみてみたいと思います。

この月刊サワネを、お知り合いの方に見せてあげてください、きっと喜んでいただけます。

## 多能工

日経トップリーダー8月号に「多能工化し、全員で支える」という記事がありました。いつも感じていることと共通する部分が多いので、少しご紹介します。

中小企業が人手不足を乗り越える上で、ポイントの1つとなるのが社員の「多能工化」だ。多能工化とは社員に複数の仕事をしてもらうことだ。様々な業務を担当できる社員を増やすことによって、人が余っている仕事から人が足りない仕事に社員を回すことができるようになる。

カミテという従業員40人ほどの会社が秋田にある。ここでは、従業員の多能工化に力を注いでいる。製造には、金型製造、プレス加工、製品検査などの工程があり作業内容が大きく違うが、製造担当者はすべての機械を使えるようになることを目指している。それだけではなく、経理の社員も、忙しくなると検査工程をサポートする。さらに、工場に設置した託児施設に勤務する保育士も製造工程に携わる。

多能工化を成功させるポイントは2つある。1つは、導入の意義を社員にしっかりと理解してもらうこと。もう1つは、新しい仕事を覚えてもらうための仕組みをつくることだ。研修スケジュールをあらかじめ決め、業務の内容を具体的に記した作業指示書を部署ごとに整備している。

という内容でした。小さな会社では、ある仕事ができる人が1人しかいないということが多々あります。全社的な多能工化ができない場合でも、こういった特定の1人しかできない仕事という仕事は、ない方がいいでしょう。その部分だけ多能工化しておくということが重要でしょう。

## よろず支援拠点

岡山県よろず支援拠点というものが最近できました。国の政策で各県に設置されています。ここでは、「中小企業・小規模事業者」様に総合的なアドバイスを実施することを目的にしています。1回の相談は1時間程度で無料です。助成金のことでも相談にのってもらえるようです。

支援の概略は次のとおり。

### 1. 総合的・先進的アドバイス

他の支援機関では十分に解決できない経営相談に応じます。中小企業・小規模事業者の課題を分析し、一定の解決策を提示し、フォローアップも実施します。例) 売上拡大(新規顧客獲得や海外進出等)、再生・経営改善、現場改善(生産性向上) など。

### 2. 支援チーム等の編成支援

中小企業・小規模事業者の課題に応じた適切な支援チームの編成を支援します。支援チーム編成のため、複数の支援機関、公的機関、起業OB等の「支援専門家」や、大学、大企業等の事業連携の相手先と調整を実施します。例) 企業が抱える複数の経営課題に対し、適切な支援ができる機関・専門家による支援チーム編成を主導 など。

### 3. ワンストップサービス

支援機関等との接点が無く、相談先に悩む中小企業・小規模事業者の相談窓口として、広く相談に応じます。相談内容に応じて、支援機関・専門家を紹介する等、適切な支援者につながります。

連絡先

<http://www.optic.or.jp/yorozu/>

岡山県産業振興財団、岡山市北区芳賀5301  
(テクノサポート岡山)

086-286-9667、yorozu@optic.or.jp